



20010/11 WEEKLY BULLETIN



国際ロータリー第 2790 地区第 3 分地区 B

市原ロータリークラブ会報

第 2283 回例会 2010 年 10 月 20 日(水) SAA/宮地会員 会報担当/岡本会員

例会場: 五井グランドホテル 市原市五井 5584-1

事務局 0438-38-3535

★点鐘 市原 RC 会長 西村美和子 ★ソング 手に手つないで

★お客様

●市原市体育協会 専務理事 下原 正規様、同常務理事 常澄 忠男様

★ 会長挨拶 市原 RC 会長 西村美和子



皆様こんにちは。先週はお月見例会ということで淡粋で皆様と楽しく夜例会を持つことができました。秋の夜長を美味しいお酒とお食事で会員相互の親睦がはかれたことと思います。

本日は、当クラブの会員の中でもパストガバナーの御経験をお持ちで、しかも長いロータリー歴と数々の要職を務められている齋藤会員にお願いしております。

本年度の織田ガバナーの方針は、個々のクラブの伝統や歴史を大切に、それぞれ個性のあるクラブ活動をして下さいということです。

地域により、文化・歴史というものは多少個性があるのが当たり前。そしてそのクラブらしさを失わずにロータリークラブ活動を継続していくことが、ロータリークラブの活性化に繋がると言われています。

今日はその様な意味でも、正しいロータリーの知識の解説も卓訪の中から得られ、クラブの歴史もより理解が深まるものと期待しております。

★ 幹事報告 幹事 伊藤英樹

特にありませんでした。

★ お客様挨拶

●市原市体育協会 専務理事 下原 正規様、同常務理事 常澄 忠男様



昨年は更級杯全国中学校選抜剣道大会へのご支援を頂き、誠にありがとうございました。

今年も同大会へのご支援を頂けますよう、よろしくお願い致します。

★ 委員会報告

特にありませんでした。

★卓話



●齊藤 博会員

タイトル: 初心忘るべからず

「初心忘るべからず」これ程一般に良く知られた世阿弥の言葉は無いと思います。彼は室町時代の能役者で、能の様式を確立して芸術性の高いものにした方で、足利義満の後援を受けまして、社会的地位を確立しま

した。

今日まで続けてきた芸は、総てその時その時の＜初心＞であった。過去の芸を反省と共に保有するならば、老後に多くの徳があり家業発展の礎となる。それ総て、時々々の初心の成果なのだ。故に時々々の初心を忘れるな、と言うのでございます。

これはロータリーにも当てはまる言葉でありまして、昨今のロータリー運動にあつてはその初心・原点の探究はどうもなおざりにされている傾向にあります。

100余年の先輩ロータリアンの業績を受け継いで、この団体の運動をより開発して行く為には、その運動の過去の姿を振り返り、正しく理解する必要があると思います。

そこで先人の辿った足跡を眺めて見ますと、総ての時代において、彼等は全力を傾けてそれぞれの問題を解決しております。そしてその解決の為の思想の中にあるものを、万古不易の原理として、後世に残しているのでございます。私たちは常に先人の偉大なドキュメントを、そしてその心を汲み取りながら、その延長線上に物事を考えて行く姿勢が大切では無いかと思うのでございます。

処でロータリーが始まったのは1905年、明治38年で、ロータリー運動は初期の時代には大した原則はございませんでした。当時シカゴの町に定着した無名の田舎者のポール・ハリスが、弁護士を開業したのが1896の事で、暫くして生活の事も安定して頃になって、シカゴの都市の中の欠点に気付くようになりました。中でも職業人の心の渴きが著しい。これを何とかしなければと考えたので、その考え自体の中には「世の為人の為」などと言う、高次の動機は無かった様でございます。シカゴに移り住んで4年目の事、丁度30歳の時に、何か心が寂しかった。この心の渴きを癒すには、やり様によっては自分らの手で出来無い事は何かないかなーと考え、人生に夢を置いて、その夢の命ずる処に従って社会の中にその道を開いて行った。この夢の発想が今日全世界の人々の共感を得て、これだけ広がる様になったのでございます。

1905年2月23日、ポール・ハリスは石炭屋のシルベスター・シール、洋服屋のハイラム・ショレー、それから鉱山技師のガスターバス・ロアの4人が、シカゴの町のディアボーン街のユニティビル711号室に集まって事が始まった。職業人、特に同業者同志というものはお互いに斗っている訳で、他人の行動を悪意で見ると、善意で見るとでは大きな違いになります。例えば八百屋さんが二人いたとする。一人が暑いのに、お客に鮮度の落ちた野菜をお届けして如何かと水を掛けたら、同業者がこれを見て、「あの野郎目方をごまかしてしる」と言う具合に見える。同業者と言うものは、のっけから仲良くできない。周りに居るものが、自分を破滅に追い込む可能性があると思えば、心は安らかである訳がない。同業者というものは、悪い宿命のもとに生まれた人だろうな、と言うことが解って参ります。処が大学教授と八百屋さん、デパートの社長と医者、これらの人達は同じ職業人でも、お互いに距離が遠い。すると気分が開放になって、自分の弱点でも何でも打ち明けることが出来る。此処の処が非常に大事な処で、親睦を目的とする為には同業者を排除しなければならない。そこで「親睦を目的とする処の一業一会員制の原則」が出来ました。“皆で助け合って行こう”各職業から一人だけ会員を、と言うことで、2月23日の会合は散会したのでございます。

(国際ロータリーは 1929 年ダラスの大会で、この日をロータリーの創立記念日として正式に決議しました。)

親睦を達成するためには一つの職種から一人しか、会員を取らざるを得ない。ロータリーは今でも、この点は至上命令であります。今日ロータリー運動がやや内容的に低迷しているのは、シニア・アクチブがどうだ、パストサービスがどうだ、アディショナルがどうだ。或る年の規定審議会では理事会提案として、正会員と名誉会員の二種類にする。一業五会員制までいいじゃないかと言うことで、実質的に一業多会員制にロータリーが移行しつつあるわけで、本当に程度の高いロータリーを作ろうと思ったら、一業一会員制の原則を遵守することが大事であります。これはロータリーの原点の一つですので、心に止めておかなければならないところです。

次の第二回の会合 3 月 9 日までに、また 2 人が入会しました。不動産業者のウィリアム・ジェンソン、印刷業のハリー・ラグルス。彼は例会に歌を唄う慣習を作った人で、人間はなぜ歌を唄う。歌を唄うと気分が開放的になる。「春の小川はさらさら流る・・・」と唄えば子供のころの「ドジョウすくいが思い出される。オタマジャクシを採りにいったなー、と言う気分になって、同時に童心を取り戻すことが出来る。これがハリー・ラグルスの理論でございます。

こんな訳ですから、毎回の例会に「我が生業」ばかりでなく「春の小川」でも「月の砂漠」でも何んでもよい。皆が童心に帰れるような歌を、お歌いになれば宜しいのでございます。このようにしてロータリー・ソングが出来、親睦の原則というものが出来上がって来ました。こうして、6 人で発足したシカゴ・クラブは会員も増えて来ましたが、ある日の例会にチャールズ・A・ニュートンと言う会員が遅刻して来た。皆が其の理由を問い詰めたところ、「悪かった。だけれど 12 時に集まろうと言ったが、俺は腹が減ったので食事して来た。」「なるほど、それならこれから皆で一緒に食事をしようや」と言うことになって、食事の慣習が出来たということでございます。これはロータリーの妥協の精神で、要するに主張するところは主張する。お互いに意見を出し合って、共に生きられるような親睦の道としてどういう行動の原則が出来るのか。この中にロータリーの精神が脈々と生きていますのでございます。

こうして試行錯誤を繰り返しながら、シカゴに生まれたロータリー運動は次第に盛んになりまして、一業一会員制・ロータリーソング・例会出席・時間の励行と言うことが出来上がって参りました。

そして第一は会員同士の相互扶助、第二は親睦。この二ヶ条をもって、シカゴ・ロータリー・クラブが発足しました。そうこうしているうちに何としても良質な会員を増やそうと言うことになって、特許関係の出願代理業をやっていた弁護士ドナルド・カーターに、二代目会長のアル・ホワイト氏が入会を勧めた。ロータリーの趣旨を聞いたドナルド・カーターは断固として入会を断った。「私はこの社会に住み職業を持っている。自分がいたお陰で、社会の状態が少しでも良くなったという痕跡を残したい。そういう社会的効果と言うものを念頭にない集まりは、一般市民には何の関係も無いじゃないか。そんなクラブにどうして入る必要があるんだ。」ときっぱり断られた。会長は驚いて直ぐポール・ハリスのもとに駆けつけた。これを聞いてハリスは「ごもっとも。我々は反省しなければならない。クラブ定款を改正しよう」と言うことになって、「シカゴ市民としての誇りと、忠誠の精神を鼓舞すること」と言う項目を第 3 条に付け加えました。ここでロータリーは初めて漠然とした社会的な目的、という奉仕概念が生まれるに至ったと言うことであります。

こうして 1905 年に誕生したロータリーは 1908 年より 22 年にかけて初期ロータリアンの原理開発が行われまして、22 年頃になりますと、ロータリーの思想が完全且つ大系的に定着した認識として確立するようになりました。

1923 年の国際大会の決議によって原理原則を認識し、始めてこれを文章化しました。これが有名なセントルイス大会の「決議 23-34 号」で、ロータリーの基本概念及び目的を、全分野にわたって簡明直截に記した思考形成上の最終答案でございます。(手続要覧 P84)

6 項目に分かれておまして、1~5 迄が総論、6 が各論であります。其の 1 のところに、「ロータリーは基本的には一つの人生哲学であり、それは利己と利他の調和を謀ることである。この哲学は SERVICE ABOVE SELF (超我的奉仕) の哲学に基づくものである。」と言う意味の事が記されております。

本日はこの点をお話申し上げようと思います。奉仕クラブと言うものは精神世界を求めるものですから、どうしても理念が必要となって参ります。ロータリーの代表的スローガンとして

1) HE PROFITS MOST. WHO SERVES BEST.

(SERVICE, NOT SELF)

2) SERVICE ABOVE SELF.

が挙げられますが、この標語は、ロータリー概念を端的に表現したものですから、一句一句を大事に考えなければならぬのでございます。ロータリーの初期、一般的哲学上の概念で表現しようとしたのが1908年のことで、シカゴ・クラブに入会したアーサー・フレデリック・シェルドンによって行われました。彼はミシガン大学の商学部出身で、経営学の専門家でありました。彼の理論からすると、「商取引というものは自分が利益を挙げると同時に、これに参加する相手もまた、幸せにならなくてはならない。即ち長期的商売をする為には、この両者の間に信頼関係が確立されることが必要である。この信用という精神的境地、これがシカゴクラブが行うとする。

「精神的相互扶助」

の論理的根拠である。これは相手方の身になって考えようとする奉仕に概念とも一致する。日常企業経営者の心に訴えんとするにはどんな形で表現すれば良いかと熟考した結果、遂にミネアポリスの床屋で調髪中に

HE PROFITS MOST. WHO SERVES BEST.

の語句が浮かんだと言うのです。この標語が1911年第2回ロータリー連合会で発表され、「経営の科学とは奉仕の科学の事を言う。即ち奉仕に徹するものに最大の利益あり」。

一瞬、満場水を打ったように静まり返り、次の瞬間万雷の拍手が起こった。これがロータリー宣言の最後に加えられて、この標語がロータリーの世界に君臨するようになったと言うことであります。

この後でミネアポリス・クラブの初代会長で弁護士であったフランク・B・コリンズが壇上に立ち、「ロータリー・クラブの組織の中であって、なすべきことが一つある。それは直ちに行動を起こすこと。自己の為にロータリーに入会したものは間違った会員であり、ロータリーは自己の為ではない奉仕だ。

SERVES,NOT SELF.

この二つの標語が連合会の会場で発表され、共に非公式ながらロータリーのモットーとなりました。(1950年(S25)RIの公式標語に決定)。

コリンズは、自己を否定する精神世界のみをロータリーの理念と考えたのであって、自己滅却の世界でありますから、ロータリーの世界も、宗教の世界と同一であると考えられるのでございます。

しかし実業の世界で悪戦苦闘している一般のロータリアン側からすれば、実際に常に適応出来るか否かは問題であった。果たせるかな1922年頃になるとフランク・コリンズが亡くなって直ぐに、シカゴ・クラブで有志のロータリアンが集まって、ロータリーの本質について討論した。

ロータリーは自己というものが出発点であるのに、これを最初からNOTで否定してしまつては、奉仕の実践は得られない。自己を一部肯定して置かないと、奉仕の世界と言うものは、理解することは出来ない。そこで何か良い言葉はないかと考えた末に、

SERVICE ABOVE SELF.

と言う言葉が見つかった。しかしこれは英語の用語法の中で、慣例上無いのだそうです。日本でこういうことが解っていたのが大正13年8月13日設立された神戸クラブの初代会長：松方幸次郎氏でありました。なぜなら彼は英国で育ったからで、会長になって示された標語が SERVICE ABOVE SELF.彼は非常に理解に苦しんだ。時のスペシャル・コミッショナー(準ガバナー)の米山梅吉氏が神戸クラブを訪問したとき、彼は諄々と説いたが、松方幸次郎氏は、貴方の説明では解らないと述べたと記録に残されているそうです。では松方幸次郎氏の頭の中に整理されていたのは何かと言うと、

SERVES,NOT SELF.

であったと言います。この意味することは、SERVESと言うのは中世以来の正統派の用語法によると、この世の森羅万象を司るある種の絶対者、宇宙の絶対者。これを神と読んでも差し支えないのですが、この様なものが司る神

の世界の秩序の中に、一人間が帰一することをもって SERVES と云ったのであります。即ち「天地の理法を踏まえ、そこに帰一する姿勢・思想があって、始めて人間は絶対者の世界の中に遊ぶことが出来るのだ。その帰一する時には聊も己と言うものがあってはならない。これが人間が人類社会に於いて物事を考えてゆく上に、重要な事であるという考え方であります。

こういう種類の考え方はロータリーの中に必然的に存在するものでありまして、ロータリーは奉仕哲学の思想の体系と考へて、この体系の中に帰一するロータリアンは、自分と言うものを聊も出し過ぎてはいけません。自己改善の為には、只管(ひたすら)他人に学ぶ姿勢をもって、自分の一部を放棄して他人の世界に食い込んで行け、と言うことでありますから、ロータリーは部分的な NOT SELF を持たなければならないのであります。

この様なことを宗教の世界で明解に説明したのものには道元善師の「正法眼蔵」でありまして、「現成公案」の中に「自己を運びて方法を修証するを迷いとす。方法進みて自己を修証するは悟りなり」とありまして、仏道があって自己が無い。これが悟りだと教えております。

1911年コリンズの唱えた SERVES, NOT SELF は 1923年廃止になりましたが、なお今日のロータリーの大系の中にあっては、生きていて考へても間違いではないと思ふのであります。

それはそれとして、シカゴクラブの討論の中に SERVES, NOT SELF は SERVICE ABOVE SELF に替えられた。これの提唱者でありますフレデリック・シェルドンの考へ方を見ますと、ミンガン学派の経営論を基礎としておりまして、「企業の本質は私利私欲の追求にあるが、其の利益の金高で企業経営の本質を判断してはならない。其の利益は一つの目安となるものである。また商取引においても、これに参加した相手もまた幸せになる。自分が栄えることの反対の効果で、他の人も儲けさせなければならない。即ち利己と利他との調和を計らなくてはならない。利己と利他との調和を計るには、そこに客観原理が無くてはならない。

Cosmic Consciousness(宇宙の意識)。

シェルドンは人類社会のこと、自然の運行のこと、木が育ち草が生え、花が咲き実が稔る。風が吹く、雨が降る、雪が舞う。これらを全部含めてある種の規則性がある。そして何かその背後に、これを動かしている意識があるのではないかと言う考へ方で、これを“天地の理法”と日本語で訳されております。この天地の理法によって、始めて利己と利他との調和が可能になる。即ち経営者は、ひたすら天地の理法に耳を傾けて、利己と利他との調和を計るとき、其の経営者はある程度の利潤を得て、且つ世の為人の為になると言うのであります。

然らば天地の理法は何によって認識するかと申しますれば、それは己自身によって認識するものでありますから、其の程度には個人差が出て参ります。良質なものと悪質なものと、それぞれなりに天地の理法が映ってくる。ロータリーの例会出席を通じて自己研鑽を続け、自分と言うものを改善して行く過程を通じて、己の努力と相俟って次第に自分の世界が高まって来ると、自らの手で高い水準において、臆げながらも天地の理法が見えるようになるであろう。そうすると「利己と利他との調和」も可能になり、その人の心の中に、奉仕の心が宿るようになる。それを目指して自己を否定しながら、自己改善を勧めて行こうとするのがロータリーの奉仕の世界であり、其の努力の中にロータリー運動の本態がある。即ち奉仕とは己を高めて行く。自己改善をして行くことで、これが

SERVICE ABOVE SELF.

であると言うのであります。

こうしてロータリーは個人奉仕が主体であると言われて来ましたが、もはや個人奉仕ではどうにもならないという会長が出て来ました。1978~79年度のRI会長クレーム・レヌーフは、或る地域を対象とした一つの大きな計画の方が世界に散在する小さな計画より効果がある。1000丁の小銃よりも一門の大砲の方がより効果的だと言うことと同じだ！として1000丁の小銃よりも、超弩級の大砲を作ることによって問題は解決する。国際ロータリーは1000丁の小銃を集めて大砲にするんだと言って3Hプログラム(保健、飢餓追放、人間尊重)を提唱し、全世界のロータリーアンから一定の醸金を求めて来たのです。(ロータリーの友 26、1978、NO11、P14)

ロータリーは従来個人奉仕を提唱して来ましたが、ロータリー運動が始まってから今日に至るまで、1000丁の小銃を集めて一門の大砲を作るという発想は未だ曾て持ったことが無い。始めてロータリーに入会したロータリアンは一丁

のピストルかもしれないし小銃かもしれない。しかし例会に出席する過程の中で、一丁のピストルを一門の大砲に育てる処に、ロータリーの願いがあります。そして 1000 門の大砲に育てるのであります。

そんなことで全世界の 60% のロータリアンの拒絶を受け目的達成はならなかった。

ロビンス会長の言を借りるまでも無く、ロータリーの真価は、誰が如何程の金銭を集めたか、如何なる計画を実施したかということではなく、其のクラブがどんなロータリアンを育て、どんな人作りをしたかということに尽きると思います。

こうしてロータリーの本質概念が確立され、初期の運動の発展の中で原点的事実には色々なものが積み重なって、ロータリーは今日に至っているのです。

こうして我が国にも定着したロータリーですが、現在日本のロータリアンの数は、減少の一途を辿っております。経済状態や健康上の理由だけでは割り切れないものを感じます。曾て私がガバナーを務めさせて戴きました 1987 年には、当地区ロータリアン 3,554 名、処が 2010 年 7 月には 2,858 名、696 人、19.6% の減少、日本のロータリアンも 10,000 名 (9.8%) 減少しております。

日本のロータリーと世界のロータリーとの間に、ずれがあるのではないかと。私たち日本人は、与えられた枠組みの中で最大の力を持ち合わせているが、其の枠組み自体を問い直すことはしないように思います。総ての変化が日本のベースではなく、世界ベースで進められて来てはいないかと。

喉の渇きは水を飲めば治りますが、心の潤いを求める日本流のロータリーは、もはや世界に通用しないのではないかと。最近ではビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団の「ロータリー二億ドルのチャレンジ」により、ロータリーの奉仕の概念、理念、基準までもが変更された様に感じます。ポリオ撲滅達成のため、それらが犠牲になった。

ロータリーはもともと、世界中でポリオに苦しむ子供を救済しなければとの、奉仕の理念を持っておりました。それが、壮大なポリオ撲滅計画のために、資金を集める挑戦となった。目的よりも、それを達成する手段(寄付)になった。奉仕理念も、マネーによって左右される。ロータリーの本来の姿は、国際ロータリーの本部で決められるのではなくて、個々のクラブによって方向つけられるべきであります。原則が失われて行く。日本のロータリアンの先人たちが、我々のために敷いてくれたルールが、遺物のごとく忘れ去られて行くのが現状であります。グローバリゼーションの方向性には逆らえず、我々もそれに対応した行き方をしなければならぬ時代かも知れません。しかしロータリーは、社会改良の使命を持つ精神運動であって、実践サービスはそこから出発すべきものであることを忘れてはなりません。これが本日の結論で御座います。

ご清聴感謝致します。

★ニコニコ・Sorryボックス

(財)市原市体育協会 様

第 5 回更科杯全国中学校選抜剣道大会へのご支援をよろしく申し上げます。

齊藤 博 会員

本日は卓話の機会をいただき、ありがとうございました。

西村会長・伊藤幹事

・本日は齊藤先生の卓話ありがとうございました。貴重な御経験や豊富なロータリー知識をお分け頂き光栄です。

・市原市体育協会の常澄館長、下原専務理事にもお越しいただきありがとうございました。

★ 出席報告

前々回 77.27% 本日出席 32 名 欠席 12 名 本日出席率 72.72%